



👁️👁️ みどころ

時代は1980年代。舞台は雲南省の貧しい村。第1の注目点は、美人女優苗圃（ミャオ・プウ）が「アー、ウー」しかセリフのない知的障害を持つ母親桜桃（インタウ）を演ずること。さて、韓国映画『オアシス』（02年）の美人女優ムン・ソリとの対比は？そして第2は、捨て子の女の子紅紅（ホンホン）を演ずる映画初出演の中学1年生女優ロン・リーの魅力。

徹底した貧しさの中で描かれる、桜桃と紅紅による母娘の絆の崩壊と再生という心温まる物語をじっくりと。

こりやまさに、雲南省版「大催涙弾映画」！



■□■雲南省版「大催涙弾映画」が誕生！■□■

1980年代の貧しい村を舞台に、捨て子から7歳に成長した女の子とおじいさんとの心の絆を描いた『幸せの絆』（03年）は「大催涙弾映画」と呼ばれた（『シネマルーム17』180頁参照）。その舞台は山西省のイメージが強いが、実は中国のとある山間の芍薬（シャオヤオ）村。そんな、200万円の製作費で2000万円の興行収入を突破した『幸せの絆』の向こうを張って、美しい棚田が名物の雲南省（元陽県）を舞台に展開される、捨て子から成長した少女と知的障害をもつ母親との心の絆を描くのがこの映画。つまり、雲南省版「大催涙弾映画」だ。

『幸せの絆』は7歳の少女小花（シャオフア）が懸命に生きる姿が涙を誘ったが、『さくらんぼ 母ときた道』はもう少し複雑。赤ん坊の時に拾われて紅紅（ホンホン）と名づけられた少女（ロン・リー）は、小さい時は知的障害の母親桜桃（インタウ）（苗圃/ミャオ・

プウ)と一緒に遊ぶことだけで幸せを満喫していたが、小学校に通う年頃になり自意識が芽生えてくると、「うすのろ」と呼ばれる母親の存在が疎ましくなってくるのは当然。つまり、それまでは母親から示される盲目的な愛情に応えるだけで幸せだった紅紅の成長によって母娘の間に大きな転換期が訪れるわけだ。そんな、少女の成長に伴う母娘の絆の崩壊とその再生がこの映画のテーマ。そんな、雲南省版大催涙弾映画でタップリと涙を流したい。

■貧しさに注目！■

中国共産党は2008年12月18日、鄧小平の掛け声によって1978年から始まった改革開放政策の30周年記念式典を開催し、胡錦濤国家主席(党総書記)は「30年来、世界が注目する新しい偉大な成果を達成した」と総括した。そして、今後も中国の特色ある社会主義を堅持しつつ改革路線を継続していく決意を表明した。たしかに、改革開放政策によって中国は急速な経済成長を遂げたが、沿海部と内陸部の格差、都市と農村の格差は拡大し、さらに党幹部や政府高官の汚職・腐敗に対する民工の抗議・反乱が目立っているのが現状だ。

中国第6世代李継賢(リー・チーシアン)監督の『1978年、冬。』(07年)は、山西省の田舎町である西幹道を舞台に、そんな重大な歴史の転換点を自らの子供時代を投影させながら描いた秀作だった(『シネマルーム20』175頁参照)が、そこでの1つのテーマは貧しさ。昔の日本映画には『にあんちゃん』(59年)のような貧しさをテーマとした映画があったが、今ではそんな映画は全くなし。しかし、中国映画は『黄色い大地』(84年)、『あの子を探して』(99年)、『初恋のきた道』(00年)などの名作はもちろん、最近でも前述の『幸せの絆』や『トゥヤーの結婚』(06年)(『シネマルーム17』379頁参照)、『雲南の少女 ルオオマの初恋』(02年)(『シネマルーム17』392頁参照)など、貧しさを前提として成り立つ心温まる物語が多い。

この映画でも、1980年頃の雲南省の田舎村の貧しさが最初のテーマ。棚田の美しさを愛でるのもいいが、それには一定の豊かさが必要。足の不自由な男葛望(グォワン)(トゥオ・グウオチュアン)には誰も嫁が来なかったため、仕方なく知的障害を持つ桜桃と結婚したわけだが、まずこの夫婦の衣食住に注目して、その貧しさぶりをしっかりと確認しよう。これが、1980年当時の中国農村部の生活実態なのだ。

■ミャオ・プウに注目！中国四大女優とは？■

この映画の注目は、何とんでも知的障害をもつためまともに言葉すら発することができない「うすのろ」の桜桃を演じた苗圃(ミャオ・プウ)。私が彼女をはじめて観たのは、中井貴一がプロデューサー兼主演した『鳳凰 わが愛』(07年)。そこで私はミャオ・プウについて「ネット情報によると、『特に美人というわけではないが、確かな演技力と存在

感は同世代の女優たちと比べてもぬきん出ているのではないか。すでに早くも『実力派』と呼ばれている』とのこと。私としてはこちらの意見の方に賛成で、プレスシートはちよっと誉めすぎ・・・？」と書いた（『シネマルーム17』262頁参照）。

彼女は、『さくらんぼ 母ときた道』で第17回永楽杯・上海映画批評家大賞最優秀主演女優賞を受賞するなど高く評価されたが、『鳳凰 わが愛』のプレスシートと同じように、『さくらんぼ 母ときた道』のパンフレットにも「中国の新しい時代を担う4大女優の一人」と書かれている。しかし、私が知っている中国四大女優は、章子怡（チャン・ツイイー）、徐静蕾（シュー・ジンレイ）、周迅（ジョウ・シュン）、趙薇（ヴィッキー・チャオ）の4人だから、ここで言う「中国の新しい時代を担う4大女優の一人」って一体ダレ・・・？ケチをつけるつもりは毛頭ないが、やはりこういうあいまいな誉め方はよくないのでは？

■□■前半のストーリーの核は？■□■

『幸せの絆』でも捨て子は女の子だったが、この映画でも山の中に捨てられていたのは女の子。それはなぜ？それは1979年以降一人っ子政策をとり始めた中国では、当然男の子を欲しがらるためだ。私は男だから全然わからないが、面白いのは桜桃が異常に（？）赤ん坊を欲しがっていること。腹に男の子の絵を貼ってはしゃぐ姿は、ミャオ・プウの熱演によって笑いを誘う。また知的障害があっても、赤ちゃんを産むためには男女の営みが必要なことはよくわかっているらしく、その方面は積極的。場合によれば、真っ昼間でもその気になればオーケーというところも面白い。

そんな桜桃だから、葛望に怒られて家を締め出された山の中で偶然赤ん坊を拾ってきた後、興味の対象が赤ん坊一辺倒になったのは仕方なし。現金なもので、そうなるも葛望がその方面を求めても桜桃は完全拒否で、夫に全然かまわなくなったから葛望はおかんむり。そこで、役に立たない女の子を育てても経済的にしんどいだけと考えた葛望は、桜桃の隙を盗んで紅紅を他の夫婦にやってしまったから大変だ。必死になって赤ん坊を乗せた車を追いかける桜桃。車を見失った後もそのまま歩いて町に行き、必死で赤ん坊を乗せた車を探す桜桃。もちろん着の身着のまま、お金もなし。そのう言葉もしゃべれないのだから、こんな搜索活動は、『あの子を探して』で観た、代用教員の魏敏芝（ウェイ・ミンジ）先生が町に出ていった男の子を探す以上に大変だ。

村長（マ・リーウエン）や村の人々から「あんたは薄情だ」と批判されて、葛望がやっと桜桃を探しに来たからよかったものの、あのままでは桜桃はきっと野垂れ死にしていたはず。そんな前半のストーリーの核となる、必死になって紅紅を探し回る桜桃の熱演に注目！

■□■紅紅役のロン・リーにも注目！■□■

この映画には、①赤ん坊の紅紅、②幼少期の紅紅、③小学校高学年の紅紅が登場する。

映画前半は、赤ん坊の紅紅を取り戻すことに成功した葛望、桜桃夫婦が紅紅を中心に幸せな生活を送っているところでハッピーエンドとなるが、後半は一転して母娘バトルが焦点になっていく。この映画の原題は『桜桃』だが、邦題は『さくらんぼ』を小さく残したまま、メインタイトルは『母ときた道』。これは『初恋のきた道』をイメージしたのだろうが、それ以上に紅紅の視点からつけられたもの。

映画にナレーションを入れることの是非は難しいが、成長した紅紅が語るこの映画のそれはグッド。幼少期の紅紅はひと言もしゃべらず、「あの頃が、母と私の1番幸せな時代でした」と語られるナレーションの中で、2人が楽しそうに遊ぶシーンが綴られていくだけ。ところが、紅紅が成長し自我が芽生えてくると・・・？

そんな微妙な年頃になった紅紅を演ずるのは、1000人以上のオーディションの中で選ばれた、雲南省・元陽の小学生で現在は中学1年生のロン・リー。もちろん、この映画がデビュー作だが、演技はしっかりしているうえ、なかなかの美人。『雲南の少女 ルオマの初恋』の李敏（リー・ミン）も映画初出演の素人だったが、さすがに人口13億の中国では、探せば隠れた才能、未来の大女優がゴロゴロいるようだ。『あの子を探して』のウェイ・ミンジは1作だけで終わったが、本作の出演を経て、現在は役者・歌手を目指しているというロン・リーとその将来にも注目！

■□ 『さくらんぼ』 だけでよかったのでは？ ■□

この映画は原題も『桜桃』、英題も『CHERRIES』とシンプルだが、邦題はどうしても説明的になりがちで、『母ときた道』をメインにした。しかし、観客に「このタイトルはなぜ？」と考えさせるには『さくらんぼ』だけでよかったのでは？

桜桃はミャオ・プツ扮する母親の名前だが、同時に幼少期の紅紅がよく母親に採ってもらったおいしい食べ物。貧乏暮らしの紅紅にとってはこのうえなくおいしい食べ物であると同時に、母親の愛情の表れそのものだったはずだ。しかし、母親が「うすのろ」とみんなからバカにされている理由をはっきり自覚し、どこまでも自分にかまってくる母親を疎ましいと感じ始めた時、その母親が差し出すさくらんぼに何の魅力もなくなっていたのは当然。もちろん、桜桃にはなぜ紅紅の態度が変わったのかを理解する能力はないから、いくら拒否されても同じことをくり返すだけ。すると、それがなおさらうとうしく思うことになる悪循環となり、桜桃と紅紅の母娘関係は悪化の一途を。

映画後半はそんな風に悪化していく母娘関係が、何とも悲しげに描かれていく。そして、ある日、ある事件によってその対立がピークとなり、それが原因で紅紅は高熱を出して病院に運び込まれることに。単なる風邪だったのは幸いだったが、ここで大きな役割を果たすのがさくらんぼ。母娘関係の修復のために、何よりも大切なのは紅紅の心の持ちようだが、入院を契機として紅紅の桜桃への感謝の気持が復活してきたのは一体なぜ？そして、そこにさくらんぼはどんな役割を？そんな、いかにも中国映画らしい心温まるシーンを、

涙を流しながら味わいたい。

■□後半の印象的なシーンをひとつ■□

この映画は107分とほどよい長さだが、前半と後半で物語がはっきり分かれるつくりとなっている。つまり、前半はハッピーエンドだが、後半は？

紅紅の入院を契機として、再び良好な母娘関係が復活したのは幸いだった。そこで涙を誘うのは、今はやさしく母に接している紅紅が桜桃に対して字を教えてやるシーン。「どんな字を書きたい？」と聞いてもそれに答えることができないのは仕方ないが、そこで紅紅が思いついたのが紅の字。教わったとおりに書けたかどうかは別として、それを書いた桜桃はホントにうれしそう。

韓国映画『オアシス』（02年）では、脳性麻痺の女性を演じた美人女優のムン・ソリが、「まともなセリフもなく、『アー、ウー』ばかりのセリフ(?)をしゃべり、顔面をゆがめ、手足を引きつらせ、全身をぶつけていく演技」を見せた(『シネマルーム7』177頁参照)が、本作の桜桃もそれに準じるような難役。映画前半の必死で紅紅を探し求める姿とは対照的に、映画後半の字を教えてもらっている桜桃の幸せそうな表情は、実に印象的。

■□悲しいラスト？それとも・・・？■□

ところが、その後迎えた紅紅の誕生日の日。さくらんぼを採りに出かけたはずの桜桃が家に戻ってこない。ひょっとしてどこかで事故に？そう心配した葛望と紅紅はひと晩中桜桃を探したが見つからないまま、数日が過ぎていくことに。寂しさに耐えながら一生懸命勉強に励む紅紅だったが、そんな中で村長からもたらされたのは、「桜桃を見かけた者がいる」との知らせ。葛望と紅紅は急いで現地へ駆けつけたが……。さてあなたは、これを悲しいラストと解釈？それとも……？

10月26日に観た霍建起(フォ・ジェンチイ)監督、ヴィッキー・チャオと陸毅(ルー・イー)主演の『初恋の思い出』(05年)もそうだったが、中国映画はこのように解釈を観客に委ねるものが多い。さらに、そんな印象的なシーンの後この映画は、医学部に入学した紅紅による、「私は父親から、母さんのおかげでお前はいるんだと教わった。母さんを恥じた心を今は悔やんでいる。母の思い出を語ることで子供たちに伝えたい。どうかお母さんを大切に」とのナレーション。

『幸せの絆』も成長した小花による村への恩返し of 姿がラストシーンだったが、それと同じように、こんなナレーションによってあなたの心が温かい気持ちでいっぱいになることまちがいないし。

2008(平成20)年12月20日記